

令和2年産水稻トビイロウンカの被害

中国四国農政局トビイロウンカ被害対応検討チーム

- 令和2年は、例年よりも飛来時期が早い、飛来回数や量が多い、飛来範囲が広い等の傾向が非常に強かった。
- さらに、夏の気温も高く、トビイロウンカの増殖に適した気象条件であったことから、増殖ペースが早く、頭数も急激に増加。結果として東海以西の地域で被害が生じた。
- 中国四国農政局管内においては、山口県、岡山県、広島県等で過去最大級の被害が発生。

【令和2年産水稻の被害状況（ウンカ）】

	水稻作付面積 (子実用) (ha)	被害面積 (ha)	被害量 (t)	作況指数
中国地域	101,200	26,200	24,700	92
四国地域	47,400	10,400	3,870	96
岡山県	29,800	7,280	3,720	95
広島県	22,600	6,250	3,070	94
山口県	18,900	10,700	17,200	73

資料：農林水産省「令和2年産水陸稲の収穫量」（12月9日公表）
注：赤字はウンカの被害としては、公表が始まった2004年以降最大値

山口県萩市における被害の状況（同一ほ場を4日後に撮影）



9月4日撮影



9月8日撮影

【農林水産省のトビイロウンカの防除対策】

（令和2年12月水稻病虫害防除対策全国協議会）

- 1 病虫害発生予察
国は、発生状況を的確に把握するため、国内外の情報を集約・分析し、5月以降都道府県へ発信
- 2 発生予察情報等の発信
令和2年の要因分析結果の情報発信と防除の必要性等について周知徹底。
- 3 発生予察情報等を踏まえた防除の実施
臨機防除ができるよう植物防疫関連団体で構成される協議会を基盤とする緊急時の対応体制を整備。
- 4 防除体系
薬剤抵抗性に関する情報等を都道府県が閲覧できる体制を構築。



わかりやすいリーフレットを
農林水産省
Webサイトで
公表



【トビイロウンカ】

- トビイロウンカは稲の害虫の一種で、体長は3.5~4.5mm程度。日本で越冬することはできず、6月から7月の梅雨の時期の下層ジェット気流に乗って中国南部から飛来し、稲の株元で生息する。
- 幼虫、成虫ともに移動性は低く、稲を吸汁加害する。
- 夏の気温が高く、雨が少ない年に水田で急激に増殖する傾向にあり、吸汁加害がひどい場合には、稲が坪状に枯れる「坪枯れ」被害を引き起こす。
- 通常9月に入ってから被害を発生させるため、秋ウンカと呼ばれる。

○ トビイロウンカ被害を回避するためには、適時・的確な農薬防除が重要

- ① 田植え前は、持続性の高い箱施用剤(トリフルメゾピリム配合剤等)を使用する。
- ② 本田では成幼虫の数が要防除水準を超えたとき、また、第1世代・第2世代の幼虫期に株元まで農薬がかかるように確実に防除を行う。

注: 施用する農薬、防除のタイミングは病害虫防除所等の指導に従う。

○ 併せて、耕種的防除により被害の出にくい環境を整備

- ① 窒素過多により稲の生育を旺盛にさせないように施肥管理する。
- ② トビイロウンカが定着しやすい時期を避けるように移植実施時期を前後にずらす。
- ③ 密植や過繁茂とならないように移植本数を調整する。
- ④ 水管理は数日間隔で湛水と落水を繰り返す。



トビイロウンカにより全面枯れとなったほ場(高知県香美市)



稲を吸汁するトビイロウンカ